

R3 年度第 1 回エゾシカ・ヒグマ WG 指摘事項と対応（ヒグマ関係）

| ＜次期計画の目標設定について＞   |   |                              |
|---|---|------------------------------|
| 意見  | 次期計画における対応  | 備考                           |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人身事故と人に起因する危険事例件数について、中長期目標と計画目標が同じ「ゼロとすること」になっている。計画期間内の目標の積み上げが中長期目標となるので、数値目標を中長期目標に入れないのであれば表現をかえてはどうか（愛甲委員）。</li> </ul> | <p>中長期目標の記載は具体的な数値ではない表現に書き分ける。</p>   | <p>資料 7 p6</p>               |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標②（人身事故件数）について、捕獲従事者の事故は一般と分けて考えた方が良いのではないかと（山中委員、佐藤委員）。</li> </ul>   | <p>捕獲従事者の事故は、目標達成状況を評価するための指標とはしないこととする。一方で、捕獲従事者の事故防止も重要であることから、別途集計を行う旨を注記する。</p>                 | <p>資料 7 p6</p>               |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標③④⑦（危険事例件数）について、人の問題行動に起因する危険事例のみを対象にしても良いが、そうでない危険事例も問題を孕んでいる可能性があるためモニタリングは継続すべき（山中委員）。</li> </ul>                       | <p>目標設定の項目は引き続き現行どおりとし、モニタリングも継続する。</p>   | <p>資料 7 p6</p>               |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標⑦（漁業活動関係の危険事例件数）については別の目標と統合するのではなく引き続き個別に把握すべき。（山中委員）。</li> </ul>   |   | <p>資料 7 p6</p>               |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標⑤（出没件数）及び目標⑥（農業被害額・面積）について、町によってはわずかであっても、目標の対象外とするのではなく、何らかの件数で目標設定すべき（山中委員）。</li> </ul>                                  | <p>いずれも現行どおり 3 町を対象とする。ただし、目標⑥については、羅臼町・標津町では根拠となる鳥獣被害防止計画の数値目標が設定されていないため、引き続き被害状況を注視する旨を注記する。</p> | <p>資料 7 p6</p>               |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標⑧（知識の浸透）について、今年度のコロナ禍でのアンケート結果だけを以て数値目標設定は無理がある。（愛甲委員）。</li> </ul>   | <p>アンケート結果による目標達成状況の評価等を踏まえ、WG でご検討いただきたい。</p>  | <p>資料 7 p6<br/>資料 3 別紙 3</p> |

| ＜目標達成に向けた方策の設定について＞  |   |   |
|--|---|---|
| 意見   | 対応  | 備考  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対策の努力量について、現行計画の総括の際に各目標に対するアクション（やったこと）の実績・評価を記すべき（愛甲委員）。</li> </ul>   | <p>現行計画の総括部分において、アクションプランによる対策の実績・評価や、今後の課題等を簡潔に記載。</p> | 資料 7 p2-5   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本計画期間におけるメス総捕獲数 53 頭の 30%（16 頭）を農地捕獲が占めている。そこを重点的に対策すれば目標①と④の達成に繋がる。このように、どこをコントロールすれば目標達成できるのかを把握して、方策を見直すことが重要（間野委員）。</li> </ul>                  |   | 資料 7 p16  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人為的死亡数は農作物関連の事例が多いが、農作物で誘引したか否かが重要。電気柵等のディフェンスと収穫前後の農作物管理をワンセットで考えないと解決しない（梶委員）。</li> </ul>   |   | 資料 7 p16  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 水産加工場関連の問題は、電気柵設置等の技術的対策や意識改革が進んでいるが、臭い等でヒグマを誘引する状況は改善されていないように思う。抜本的解決に向けて、改善されない理由を明らかにして、方策を立てる必要がある（梶委員・間野委員）。</li> </ul>                       |   | 資料 7 p16  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 危険事例を減らすという目標達成のためには、単に普及啓発を継続するだけでなく、財政面や鳥獣関係以外の部署との連携等も考慮して、もう少し踏み込んだ対策が必要ではないか（佐藤委員）。</li> </ul>   |   | 資料 7 p15-16   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対応策がどの程度実現可能性があるかという議論も必要（松田委員）。</li> </ul>   |   | 資料 7 p15-16   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ヒグマに起因する危険事例が概ね 3～4 割発生している。確度の高い個体数推定とモニタリング体制を前提として、早め・強めの管理オプション（行動段階 1 又は 1+の個体も、ゾーン 3・4 や特定管理地で早めに捕獲）を選択肢に加えることも検討して良いのではないか（佐藤委員）。</li> </ul> |   | <p>新たな全道計画の方針と整合がとれるか等も考慮して十分な議論が必要。</p> <p>環境総合研究推進費の結果及び全道計画の見直し内容等を踏まえて引き続き WG でご検討いただきたい。</p> |

| ＜ヒグマ個体群モニタリングについて＞   |                         |                     |
|--|-------------------------|---------------------|
| 意見   | 対応                      | 備考                  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 推進費によって精度の高い個体数推定が可能となった。推進費終了後、個体群の動向を把握するため、継続性が担保されたモニタリング体制の構築が重要な課題（宇野委員・山中委員・間野委員・佐藤委員）。</li> </ul> | 環境総合研究推進費の結果等を踏まえ、今後検討。 | 資料 7 p16-17<br>資料 5 |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ミズナラの結実調査は、バイオマス（重量）で示すことで年変化が顕著にみえてヒグマとの関係が明確になるのではないか（桜井オブザーバー）。</li> </ul>                             | ご指摘のとおり対応（参考資料 4）。      |                     |